

速攻天国行きの手を持つ女

著) 七華 妖介





目次



はじめに

この作品は、著作権、又は個人情報保護等の目的の為、一部にフィクションを取り入れたノンフィクションです。

目次

c o n t e n t s

目次		3
序章		4
第一章		魅せられて	20
第二章		接触	42
第三章		イカせ合い 其の一	63
第四章		出逢い	87
第五章		魅惑	111
第六章		悩殺	128
第七章		瞬殺	153
第八章		イカせ合い 其の二	196
終章		232
あとがき		240

速攻天国行きの手を持つ女

序章

六月下旬、都内に位置する中堅出版会社のビルの一室に、年季の入った業務用エアコンがコンプレッサーの唸り音を響かせている。その耳障りな音を掻き消すかの勢いで室内には彼方此方から内線電話のベルが鳴り、Yシャツを胸元まで開けた編集者達の苛立った声が飛び交っていた。連日の猛暑により酷使した為か、空調の効きがすこぶる悪い。

次第に机の中敷きを団扇代わりに手にする者が増えようと「まずは空調設備を直すべきだ」と言い出す者はいない。ひとたび口にしようものなら、その作業に自身が充てられる事を新入りでもない限り、場に居合わせる一同が充分に承知していた。

無造作に配列されたデスクの上はそれが内規であるかの如く、一様に書類が散乱している。見かねて整理を試みれば席ひとつで三十分以上時間を奪われる上に、漏れなく赤の他人の生殖器を拝まされる羽目に遭う。そこに蠅が2〜3匹たかっけていても何ら違和感はない。掃き溜めの中、わずかに残る整頓されたエリアがあった。その一画では若い女性編集者が今日も朝からパソコンに向かって、黙々と剥き出しの男性器にモザイク加工を施している。編集部に訪れる部外者らが、用件を済ます以前に目を丸め立ち尽くす光景は日常茶飯事。

「ヒッ！」と小さな悲鳴が聞こえる事も間々あるが、視線を上げる者は誰一人いない。

もし部外者の側から声を掛けられたなら、そいつは運がないのである。当面の課題以外にいちいち応対するほど編集部員らは御人好しでなければ、そんな暇もない。

一番出入りの激しい配達業者に女性が少ないのが、せめてもの幸いといえる。

そのフロアの片隅でいつものように冷えた缶コーヒーを飲みながら、俺は先週に取材したピンサロ嬢、「ルナちゃん」の紹介レポートをおざなり気分で纏めていた。

出版会社に数年従事した者にとってそれは半ばルーチン作業と化し、先々週取材に行った道玄坂の性感マッサージ嬢、「由香ちゃん」との判別すら既に曖昧になっている。

とうに彼女達への関心など失せていながら、相変わらず社交辞令で満載のべったり記事に頼り切り、ようやく誌面のスペースを半分ほど埋め終えると、パイプ椅子の背凭れに体をあずけて煙草に火つけた。

と、その時だ。隣の席で作業をしていた、いかにも擦れてなさそうな色白の草食系男子が見計らったように口を開いた。

「ブレイクタイムつすね。僕、今日はコーラでも飲もうかな。ついでに買ってきますけどいつものやつでいいですか？」

「いや……、いい。今、飲んだばかりだ」

編集部内で俺とは一番仲が良く、舎弟的存在の新人編集部員、加藤智紀である。

人懐っこくて少々間の抜けた所が、女性編集者にいわせると母性本能が擦られるそうだ。

「そうすか。じゃあ僕も後にしよつと。ところで最近だと一番抜ける女って誰ですかね？」
まだ女を知らないこの童顔男、俺の記事を読んでは、のべつにマスを搔いている。

「抜ける女ねえ………まあ、まずないな。萎える女だったらいくらでも紹介するけどな。

近頃どいつもこいつも同じ顔して、正直こっちもうんざりしてるんだ。どの店に行っても茶パツにカール。お前らバービー人形かっての。少し前は、化粧するにしても女の個性が出たもんだが、今じゃそれすらマニュアル化されてる感じだ。少しは自分の頭で考えろと言いたいね。仕事でなけりやあ、こっちから願い下げだな」

「へえ、そんなもんっすか。やっぱヤツてる人数が多いと食傷気味になるんですかね？僕としては羨ましい限りですよ。ああ、はやく一人前の『男』になりたい！」
やや知性の乏しそうな能天気ヅラを晒しながら童貞人間は吠えた。

風俗嬢に限らず、最近の若者には生きる力が弱い気がする。自主性や欲が希薄なところもどこか生物として不完全な印象を受ける。何でもかんでもマニュアルに頼って、知らない事はすぐ他人に聞くあたり、この加藤くんも典型的な今時の若者だ。

「そういえば直さん、『速攻女』って知ってます？」

「はあ、何じゃそりゃ？」

今から一服しようとする気分の中で、つい思慮の欠片も見えぬ返事が突いて出る。

気心も知れて一周り以上歳の離れた加藤に対し、もはやジェネレーションギャップを晒すことなどに何の躊躇いもない俺は、続けざま面白半分に関詰めた。

「それは都市伝説のターボ婆の事かね、ちみい？ ……って、人面犬世代のお前には絶対に分からんだろな。ダハハ……」

この世間知らずで無垢な坊やは、暇潰しにからかう相手としては理想的だ。

善し悪しは別として、こいつは他人の心積もりに頓着がない。それ故、会話をしても滅多なことではストレスを感じることがない。打算抜きに接してくる彼の存在は、実際、編集部内の潤滑油として平時有効に機能していた。

本来なら組織内に最低ひとり必須の、もっと珍重されて然るべき逸材といえる。

「何すかそれ？ 『速攻女』っていうのは、今2ちゃんが一番熱い激エロ女のことですよ。

この『速攻女』さんが実は超イケてるんですよねえ」

「おいおい、また2ちゃん女かよ。お前そんなのばかりに夢中だから、いつになっても童貞を捨てられんのだぞ。そろそろ生身の女の良さに気づけって」

半ば先輩面しておちよくってはいるものの、俺は密かに加藤を買っていた。

決して本人の前では口にせぬが、若干対人関係に偏りがある俺にとって、他者と分け隔てなく接しられる加藤の存在は、羨ましくもあり、一部分では憧憬の対象であった。

もつとも彼に対して、「買い被りだ」、「単に何も考えてないのよ」といった意見が多いのも事実だが、もし彼がいなければ、おそらく俺は今、この編集部にいなかったであろう。

広く浅い人間関係よりも狭く深い人付き合いを好む、まさに現代社会には決して適さない性質のこの俺が、日常こうして気軽に与太話を出来るのも、ひとえに彼のおかげである。編集部内において加藤は紛れもなく俺の心の拠り所であった。

「僕だって本当は三次元の女と付き合いたいですよ。けどそんな暇もチャンスもなかなか無いですもん。いいなあ……直さんは仕事でデキて……マジ羨ましいっす」

自分の欲望を一切包み隠さず、他人に曝け出せることも彼の才能のひとつだ。

「あつ、でも今度の『速攻女』だけは、今までの二次元の女とは別格なんです。ちよつと待って下さいね……」

加藤はPCの画面上で作業中のブラウザーウィンドを全て閉じた。

「ぐはっ！ しまった最小化したつもりが………まだ上書きしてなかったのに……」

「おいコラ、今しつかり警告のメッセージ出てたろ」

ただ欲を言えば、彼がもうちよつと賢ければ、俺の未来もさらに有望となるのだが……

「……………コレつす。僕の今一番の楽しみが、このスレなんすよお」

加藤は誇らしげに胸を反らせると《お気に入り》に登録してある件の画像を開いてみせた。モニターには某巨大掲示板サイトのスレッド(特定の話題のテーマ)が映し出されている。

画面のレイアウトを視認し以後の展開を予見した瞬間、束の間、のほほんとしてた気分が一気に削がれて閉口した。『うわっ、面倒くせえ!』それが心の第一声だ。

一番最初に投稿されたであろう書き込みからして、すでに読むのを敬遠したくなる怒涛の長文が続いている。俺は出したい溜め息を懸命に押し殺し、おもむろに加藤からマウスを奪った。

「ほお、どれどれ、加藤君のマイブームはつと……………」

至極小さく、しかし相手には充分聴き取れる按配で呟いてから、画面を熱心にスクロールさせた。真相は御察しの通り。当然、書かれてる内容など全て読み飛ばしている。しかし仕事場において若い連中とのコミュニケーションをおざなりにするわけにもいかず、一応視線を上下に動かし加藤がのめり込んでいるという掲示板に対して、あたかも興味を持っているかの素振りを演じている訳である。『まったく、後輩を立てるにも骨が折れるぜ…………』依然として所々に読む気が失せる長文が現れた後、品のない罵倒、少々長めの文章、意味

不明なコピーペ（コピー&ペースト）などが永遠と続いている様子だ。

「…………ふむ…………、なるほど。んじゃあ、残りは時間が空いた時に読んでみるよ」

頃合いを見計らうと、俺は逃げるように自分の仕事へと戻った。だがしかし、

「もう直さん、ちゃんと読んでくださいよお。なにが『なるほど』っすか。普通の風俗嬢なんかより、ガチで萌えるんですからあゝ」

落胆の感情を剥き出しに、溜め息混じりの声が容赦なく指摘してくる。

「へっ？ ああ……………ははは……………」

『しまった。スクロールさせるのが、ちと速すぎたか…………』

一世一代、渾身の演技は徒労に終わった。

『普段は素直過ぎて可愛いくらいおバカなくせに、こんな時だけは勘が良いもんですな』
猿芝居だったとはいえ俺の気尽くしも知らずに、加藤は駄々っ子の如く、なおもこの女を推している。後でゆっくり観るということで、なんとかその場を取り繕い加藤を気遣うと
《自身の性体験を赤裸々に語る女が、ネット上で話題になっている》
という大雑把な情報（サマリー）だけ捕捉し、取り敢えず頭の片隅に留めておいた。

俺の名は五十嵐直人。東京都所在の四和出版株式会社と契約するフリーのライターだ。

全国各地にある風俗店を訪れて体験取材を行い、それを記事にすることを生業としている。端的に言えば性風俗店のレビュアーである。頭に「超」を三つほど飾るのが似付かわしいニッチ産業だ。そんな職業に需要があるのかと聞かれれば、俺が明日くたばろうとも困る奴などいない。だからこそ無理やり隙間をこじ開けて、そこに価値を創出するのが甲斐というものだ。また、性風俗に関連性があれば、ジャンルを問わず何でも記事にする。

最近、歳とともに顕著ではなくなってきたが、気性としては直情径行。年齢は……おっと、不詳ということにすると魅力値が多少アップするらしいので、今のは聞き逃してくれ。

人間観察とその目利きにおいて、天性の才があると自負する少しばかりの男前である。昔は一介のサラリーマンだったが、何者かに先導されるかのように画一的に働く俗世間の価値観と、それらに疑いを抱かず保守的に維持しようとする連中や、そのシステム（バイアス）に嫌気がさして、数年経った後、フリーの立場へと身を投じた。

その決断が若気の至りであったとは未だ帰結せぬが、気軽な家業と揶揄されるサラリーマンに比べると、やはり待遇面において予想した通りの代償が伴った。

息苦しい俗世間世界から脱出し、自由を謳歌する目論見でとった過日の行動も、気づけば少しばかり景観の異なるパラレルワールド《人間社会》に、左遷されたに過ぎなかった。昨今、この《人間社会》は、隙間なく地球上に敷き詰められ、冷酷且つ例外なく、もはや誰の逃亡も見逃してはくれない。まさに出口なしの樹海である。

結局俺は忌み嫌った世界と瓜二つの逃亡先で、渋々と妥協しながらも、両生類の如きバイタリティでどうかその世界に適応していた。もとより、ほかに選択肢はなかった。

それからおおよそ七年。仕事仲間にも恵まれたこともあって、今現在の生活にはそれなりに満足している。相変わらず俗世間様による『風俗なんて……』というネガティブな基調が色濃いい中、分相応の社会的役割ってやつを自分なりに果たしているつもりだ。

風俗の持つ魅力を様々な角度から分かりやすく紹介し、読者と業界との架け橋を担うのが俺の本分……などと綺麗事を抜かすつもりは毛頭ない。俺の記事で読者に何らかの影響を与えられれば充分だ。たとえそれが悪影響だったとしても、全て受け手側の責任である。

綴った記事が誰かや何かに作用する。それが世の中に刻み込む、俺が生きたという印だ。ただ、幸いにして俺の書く記事は概ね好評だ。手前味噌だが請け負った刊行物に対してはweb上の筆録も含め、多くの読者から賞賛や励ましの意見を頂戴している。憚りながら風俗と出版の世界で、多種多様の経験、実績を積み重ねてきた。その賜物であろうか。

この業界内では某ペンネームの名の下、それなりの知名度があり、今やベテランの部類に属すると言っていていいだろう。おかげで『俺』という人間の需要も、まずまず上々といえた。しかしながら時間の経過とは、つくづく恐ろしいものである。

長引く不況により縮小しつつある風俗、出版業界と、その袂を連ねるかのように、近年は仕事へ対するモチベーションが確実に右肩下がりになっていた。

そろそろ気怠さを覚え始めてきた。加えて作業で酷使した目が、しよぼしよぼと痒い。

時計は午後六時を廻ろうとしていた。ようやく勢いを落とした灼熱の陽光が、長い波長の西日となって赤焼けた光でフロアを照らす。

業務終了のチャイムが鳴ると同時に帰宅する連中の姿がちらほら目につくも、まだ大半の人間が、何かしら飲み食いしながらデスクに張り付いていた。

不況の只中といえど、これが出版業界の偽らざる日常風景といって差し支えない。因みに今し方つつがなく定時に帰った連中が、果たして世渡り上手かというところではない。まして一般企業の実務職たちが『まだ部長や先輩たちが残ってるのに…』といった葛藤を巧みに切り抜けて退社するケースとは性質がまったく異なるのである。

我が編集部内において、彼等は今日仕事が早かった。単にそれだけだ。ホワイトカラーとブルーカラーの両者の特徴を持ち合わせたライトブルーカラーとも喩えられる過酷な労働環境は、自然と合理性を追求し、編集部内から不毛な慣例を徹底的に排除していった。

プシュツ！

本日6本目の缶コーヒーに口をつけた。俺はこいつに目がない。ビールなんかより、生来よほど体内に取り込んでいるし、他人から奇異な目で見られようと、枝豆の脇に置くのも

断然こちらである。銘柄に特別こだわりはないが、甘ったるくない微糖が好みだ。

一説にはコーヒーの摂取量と学歴の高さは反比例するといった研究結果まであるそうだ。

『まあ高卒の自分にとっては、知能指数との相関のほうに希望を見出したいものですな』
もつとも俺は学歴なども含め、人間社会が作り出したものを基本的に一切信用していない。
それ故、それらに依存することもなければ、いつでも捨て去る覚悟がある。「教育」という
体の良い響を持った洗脳を、しこたま受けた連中に限って、《メイド・イン・人間社会》の
代物が、すべて砂上の楼閣であることに気がつかない。

本能が求める知的好奇心とは対極の代物に、一体何の価値があるというのか？ その事に
誰一人納得いく説明を受けぬまま、小学生時分からずっと、頭の中を血だらけにしてまで
無理矢理インチキ情報を詰め込まれた人間が、今日も日々量産されている。

まったく世も末だ。あるいは俺の方が、ガキの頃すでに見限った世の中の本質つてものを
いい加減、綺麗サツパリと捏造すべきなのだろうか？

ただひとつハッキリ言えることは、俺とカフェインはすこぶる相性がいいってことだ。

「フワア~~~~」

定時からおよそ一時間、ぼちぼち気の抜けた声が周辺から聴こえ始める。しかし注意深く

耳を澄ますと、その声の幾つかはおよそ人工的で、何らかの思惑が潜んでいる事に気づく。と、意図的に欠伸を出したと思われる者たちが、どんどん仕事のファイルやノートPCを折りたたみ、次第に席を立っていった。

捨て切れぬ慣例か、はたまた帳尻を合わせた産物か、その欠伸が暗黙の合図になっていた。四和出版のガラパゴス諸島と化した我が編集部では、「お先に失礼します」という常套句はすでに絶滅危惧種になっていた。その最終進化形が、まさか先刻の「フワア~~~~」であらうとは、流石のダーヴィン様も脱糞して驚くことだろう。

しかしそれでも反骨精神旺盛の俺としては、そんな中途半端な慣例が残ってること自体、前々から少しばかり気に食わなかった。

『挨拶するならするで、ちゃんとせんかい！ でなけりや、いつそのこと止めちまえ！』
…とも言えず、ひとまず作業を一区切り終えた俺も仕方なくそのローカルルールに従った。

「ふわあ~~~~、よっこいしょういち……っ」と

アホ臭い慣例に軽蔑の念を込め、思いつき悪態混じりで腰を上げると、今しがたトイレから戻ってきたばかりの加藤が慌てて呼び止めてきた。

「あつ！ 直さん。ちよ、ちよつと待って。もう帰っちゃいます？」

その状態で一体なぜ千鳥足になるのか全く理解不能なのだが、こぼさぬよう右手で慎重に握られた紙コップからは、コーヒーの香りが漂ってくる。こいつにしては珍しい。今日は

残業でもする予定なのか。…と、反対側の手には、指先に小さな紙切れが挟まれている。

「はい、これ。昼間のスレです。見てくれれば絶対イケますから。保障します」

渡された小さなメモ用紙には、何処かのサイトと思われるアドレスが記入されていた。

先頭付近のアルファベットの並びから、日中に読み飛ばした例のスレッドのようだ。

「ああアレか。お前が萌えくの女だったよな。しかしチェリーボーイをたぶらかす程度の女に、果たしてオイラを満足させられるかね、ちみい？ 俺のハードルはタダ（無料）の代物くらい高いよ。ダハハ……」

わざわざ長ったらしいアドレスを書いてまで俺に尽くしたがるとは、可愛い小坊主だ。

「もう、今度はしつかりと読んでくださいよ。速攻女が書いた文章に目を通しさえすればいくら直さんだってイチコロですよ」

何が何でも納得して欲しい様子である。もともと、俺はハナから興味など無いが……

「はいはい、速攻女様の魅力にはとても敵いませんよお。僕ちんウブな童貞だもくん」
そんな加藤をよそに帰り支度をしながらメモを受け取りポケットに突っ込むと、背後からポンツと肩を叩かれた。『…っ！』

「よお！ お二人さん。お疲れ！」

「おっ、お疲れ様です……って、なんだ、お前かよ。ビックリさせんなって」

居たのは編集部のマドンナの的存在……と本人が思っつて疑わない女性編集者の亀岡久美子だ。

整った目鼻立ちに、無着色のストレートヘアを肩まで伸ばしたスタイルも良い女である。

「また二人して仲良く帰宅なの？ あんた達、企画の間じゃ『おホモだち』だって噂よ」

「言わせとけて。毎回素人参加型のベタモノしか発案出来ねえくせに……」

「ちよつと、それ禁句だから」

昔から企画部の連中とは、どうも反りが合わなかった。根っから現場主義の俺としては、机上の空論をしているとしか思えない彼らの仕事ぶりは、まるで「ゴツコ」に見える。

もちろん俺の知らぬところで相応の苦労もあるのだろうが、他人の陰口を叩いてるような連中が、まともな仕事をしているとは到底思えない。

「ねえ、それより今から飲みに行かない？ 今日から屋上でビアガーデンが解禁なの」

「ああ俺はパス。加藤と二人で行ってこいよ」

「なによ、つれないわね。加藤君とふたりで飲むくらいなら最初から誘わないし。一緒にいる加藤君はいつも『余計なオマケ』なのよねえ、この『抱き合わせ商法コンビ』は！」
たしかに美人で仕事も出来る女だが、がさつな性格と歯に衣着せぬ物言いに編集部内では賛否両論があった。またどういう訳か知らないが、厄介な事にこの女、どうやら俺に気があるらしい。こちらのほうにその気はないが、彼女の性分から考えると、いつ編集部内で妙な噂が立っても、なんら不思議ではない。

小規模ながら「親衛隊」とそのレジスタンスまで存在する彼女には自ずと注目も集まった。

惚れられたほうの身としては、亀岡の言動にいつも冷や冷やものである。

彼女の言動次第で、いつの間にか俺の周辺で敵や味方が増減してる事態にもなりかねない。頼りがいのある姐御肌が魅力という意見がある一方で、他人の心にズカズカと土足で踏み込んでくる無神経な性(さが)に、「ありや嫁の貰い手がないだろう」と煙たがる声もある。本人に悪気がないところが救いではあるが、もちろん俺としては後者なわけで……。

「亀岡さん酷いっす。そこまでハッキリ言わなくても……あれ？ それとも亀岡さん流の照れ隠しってやつですか？ 実は案外本命は僕だったりして……あはは。どのみち今日はまだ仕事が残ってますから飲みに行けないですけどね。それじゃあ直さんも御疲れ様っす。帰ったら『速攻女』ですよ。忘れないでくださいね」

『ひよっとして、こいつも亀岡親衛隊か？』思わぬところに伏兵がいたものだ。

「やだちよっと、直人まで速攻女で抜き抜きしちゃうの？ 溜まってるなら遠慮しないでわたしに言いなさいよね。いつでも相手してあげるんだからさあ」

「マジっすか？ 自分、筆下ろしになっちゃいますけど、宜しくお願いします！」
会話の空気を読めない単細胞生物が、瞳をキラキラと輝かせ真顔で言っている。

「だくから坊やに言ったつもりはないのよ。お家でマミーでも飲んでなさい。あ！ でも直人にその気がないのなら、バ加藤さんと合体しちゃうっていうのも悪くない選択かもね」
一体どんな理由でそうなるのだろうか。

言いながら俺に熱い視線を送り、目いっぱい当て擦っている。

本人は上手にアプローチしているつもりらしいが露骨すぎて言葉も出ない。

「異議なしっ！ 直さんに全然その気はありませんよ！ 亀岡さんのことなんて毛ほども思っっちゃいません。隣の席の僕が言うんだから間違いないっす。なので是非：はうっ！」
これ以上お馬鹿がエスカレートする前に、亀岡の肘てつが加藤のみぞおちにめり込んだ。
『やれやれ、やっとな終わったか……』

ポジティブ馬鹿と無神経女の絡みは果てしなく面倒くさい。

「流行の速攻女で癒すのもいいけど、ひとりエッチばかりしていると加藤君みたいに脳ミソトロけちゃうからね。ヤルならほどほどにね。それじゃあ諸君、バイバイキーン♪」
「はあ？ おい、その『速攻女』って……」

続きを言いかけた時、すでに亀岡は自分の名札を裏返してタイムカードを押していた。

相変わらず自分の言いたいことだけ言って、さっさと去れる神経は流石というほかない。

同じく傍らで啞然と立ち尽くしてる：ものと思いきや、加藤は鼻の下を伸ばし惚けている。

その視線の先を追うと今しがた目の前で加藤を馬鹿呼ばわりした女の後姿がやはりあった。

『薄々感づいてはいたが、さてはこいつ……真性のマゾだな』

亀岡の言った事が少しばかり腑に落ちなかったが、いちいち詮索するのも面倒だったので改めて加藤に問い質すことなく、そのまま帰宅した。